



TITLE:

よろこび!(散文詩)

AUTHOR(S):

牧, 星子

CITATION:

牧, 星子. よろこび!(散文詩). 天界 1937, 18(199): 32-33

ISSUE DATE:

1937-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167556>

RIGHT:

よ ろ こ び ! (散文詩)

牧 星 子

Seeing very good, Cloud 0, Factor 1.0 !

水のやうに澄んだ空 !

若葉の影をうつして、

奇岩の間を渦巻きながるゝ清流に、

明鳥啼くあしたから、

長閑な美しい

鶯の歌聲ヒメモスを終日聞き流して

紫色から次第に黄昏の色に沈んで行く

遠近の山々から鼻の讀經を聞く頃まで、

浴し潔めたのであらうか !

今宵 おゝ 何と星たちの清らかなことよ、

其の色その光 じつと見つめてゐると、

みんな各々の個性をもつて、

親しく地上の自分に話しかけてくれる。

出鱈目に散らばつてゐると思つた星々が、

今 偉大なる調和美の雄姿を以て、

我にせまりくるよ。

おゝ 美の 美の 美の極みの天體 !

神に依りて創られたる世界の、

いと大いなる美を又、

此處にも見出した。

天上から吹き下してきたかと思はれる

清風の静かなメロディ、

遠く幽かに夜氣を打ふるはせつゝ

響き來るせゝらぎのトレモロ

春丈伸びた稻株にうづくまつて

去りゆく夏の憶出を歌ふ蛙達、
有明近く東天に輝き初めしオリオンの星座と、
共に秋の序曲を奏づるか、
叢にすだく虫の音、
天上にはまたいく星影、
地上にはいとも妙なる音楽、
偕に宇宙を統べ給ふみ神をほめたふ。
五尺の身體の全ての氣孔から、
醜きもの 穢れたるものを抜き去つて、
大自然の子に歸つた自分を、
今 此處に見る。
あふるゝよろこび！
力強い静かな静かな法悦！
いざ ペガスの方形を中心に、
曉雞の聲を聞くまで、
心ゆくばかり
流星の眞と美をさぐらん！

“牧星子”とは妹が生前よく用ひてゐたペンネームである。“湖畔の聲”誌には若干妹のつくつたものがのせられてゐる。（小横孝二郎）

理 學 士 荒 木 九 阜 君 出 征

花山天文臺員理學士荒木九阜君は去る10月16日●●第▲聯隊へ應召、及川部隊に編入され、同××日○○驛發、勇ましく出征した。翌日、同氏は△△驛を通過したので、天文臺員や協會員一同之れを見送つた。

氏は京都帝大天文關係者として應召者 No. 1. である。ちなみに、花山で荒木君擔當の研究は堀井政三理學士が之れに當る筈。